

ときた まりこ
【千葉薬品社長賞】 鴉田 マリ子

娘へ

3歳のあなたと2人で歩いて行こうと決めた日から、46年も経つなんて信じられないね。

池袋の下町で、お風呂もテレビもない小さなアパートで暮らし始めた私たち。

怖いものなんてなかった。そんな中で現れた一人の男性を、あなたが「パパ」と呼ぶには時間が掛からなかった。週末ごとにやって来る彼と3人で行く近所の銭湯。

いつものあなたの台詞は、「パパと入る！」

男湯に女の子が入っても、なんの違和感や心配などなかった大らかな時代だった。

帰りはアパートの前に屋台のラーメン屋がいて、家に駆け込み、どんぶりを

2つ持って走る。寒い冬の湯気は3人の心までぽかぽかに。

もう忘れてしまったけれど、きっとすごく美味しかっただろうね。

そして3人は家族に。さらに一年後、あなたに弟が生まれて、優しい筋金入りのファザコンお姉ちゃんに成長した。

18年前、がん闘病中の父親のため、仕事を辞めて最期の2か月を一緒に付き添ってくれた。辛い日々だったけれど、大好きなパパを看取ることができて良かったね。

あなたはいまでも「パパの夢をみると、恋しくて会いたくなる」と言う。

私は、かぐや姫の「神田川」のような世界だったあの池袋での一年間が浮かぶたび、胸キュンになる。

いま私は大怪我をして思うように歩けない。

心まで折れそうな私を叱咤激励して支えるあなたの存在の大きさや、独り暮らしの心細さも初めて感じた。いつも心配していたのは私の方だったのにね。沖縄と川口に離れていても、毎日のメールで温もりは感じているよ。

共に暮らした日々は20年足らずで短かったけれど、あの日握りしめた小さな手は忘れない。私の花が南の島に咲いている。

(埼玉県 / 73歳 / 女性 / 無職)